



# 川系男子の『川と人』めぐり No. 10～桂川(相模川)～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。



図1 相模川流域図 (国土水資源局の相模川流域図に加筆して作成)

## 1. 川系男子の息抜き

2013年1月26日の出来事。1月は川系男子にとって深刻な川不足。論文に追われて川に出かける機会がなく、鬱々していた。

一区切りつき、ちょっとリフレッシュをしに、川めぐりへ。今回の目的地は相模川流域。富士五湖の山中湖に源を発し、山梨県富士吉田市、都留市、大月市を流れ、神奈川県の上野原市、相模原市、海老名市、平塚市を下り、相模湾へと注ぐ。この川は同じ川でも桂川と相模川と2つの異名をもつ。山梨県側の上流域では主に桂川と呼ばれ、神奈川県に入ると相模川と呼ばれる。信濃川が長野県側では千曲川と呼ばれるように、県境によって名前が変わる川はいくつかある(特に、

山梨県側の桂川を指さない場合以外は以下、相模川と呼ぶ)。今回特に見て周ったのは赤丸の箇所(図1)。図1をみると分かるように相模川流域は少しくねった流れ方をしている。山中湖から静岡県側に流れ落ちてもよさそうだが、標高の関係もあり、山梨県側をぐるりと周って流れている。何万年も経つといずれ、酒匂川流域に河川争奪されるかもしれない。

川めぐりは一人もいいが、『旅は道連れ、世は情け』、誰かと一緒にめぐった方が断然楽しい。ゼミの同級生だったO君と出発。O君は中学校の社会科の先生なので、鎌倉の切通しを見たいということで午前中は鎌倉周辺をめぐり、その後山中湖から川を下った。

## 2. 山中湖の雪化粧

富士吉田ICを降りると路肩に雪が積まれている。峠道には、葉の代わりに青空を透かす木々がどこまでも続く。白と灰色と青の単純なコントラストがより冬の風景を美しく魅せている。

峠を抜けると、山中湖がみえてきた。山中湖は富士五湖の一つで、5つの湖の中では最も標高の高い湖で、天然の流出河川を有する湖として唯一である。（現在の流出口は東京電力の水門になっている。）富士山の東北斜面の降水を集めてきている。湖の対岸には五合目付近まで雪に覆われた富士山。太陽の光が雪で反射して神々しい。

湖畔に降りると、吹き付ける風が冷たい。横をみるとオオハクチョウが陸に上がり、からだをうずめてじっとしている（図2）。普段みるハクチョウより1.5倍は大きい。冬だから体を膨張させているのか、観光客からエサをよくもらうからかもしれないが…。（間近でカメラを撮っていたO君はいつのまにかオオハクチョウにつつかれていた。）

湖岸に沿って山中湖の北西部につくと、流出口を示す看板があった（図3）。看板が無ければここが流出口とは分からないくらい小さく（川幅2m以内）、ただの用水路のようにも見える（図4）。流出河川をもつ湖沼は河口湖と諏訪湖に行ったが、河口湖の流出口は小規模で山中湖と同程度、諏訪湖は流出河川に天竜川をもち、5倍以上の川幅がある（人為的に拡張した川幅なのかどうかは分からない）。支流から水を集めて大河になるとはいえ、相模川の源流の流出口が最初はこんなに小さいものなのかと思ってしまう。ちなみに看板にマリモのイラストがあるが、山中湖は県内唯一のフジマリモの生息地としても知られている。

湖岸付近ガラス板のようにいくつかの氷が浮いていて、そのうちの一つの薄氷にカモがちょこんと乗っかり、羽を休めている（O君は自分もカモのように氷に乗れると思ったのか、一生懸命氷の上に乗ろうとしているが、片足を載せた途端にぱりぱりと割れてしまっている。）。氷の湖と富士山の構成はまさに冬の風景（図5）。富士山、山中湖、雪、氷、水鳥etc……。まさに自然が作り出した芸術。冬は寒くて苦手だが、こんな穏やかで美しい風景をみると、冬の美しい水辺風景にはほっとする。山中湖の流出口からはじまった小さな桂川の流れに沿って、相模川流域を下る。



図2 陸でじっとするオオハクチョウ



図3 流出口にある看板



図4 山中湖流出口（右が桂川、左が山中湖）



図5 雪化粧の山中湖と富士山

### 3. 3つの水の流れ-駒橋発電所落合水路橋-

桂川をどんどん下る。都留市付近を通過。車中、桂川をみると、はるか下の方に川底が見える。このあたり一帯は河岸段丘になっていて、川、住宅、道路、住宅、道路といくつかの段丘面になっている。

道の途中、支流の朝日川と桂川の合流点付近を通っていると、朝日川に重厚感あふれる橋が。あまり相模川流域の予習をしてこなかったのに、一体これはなにかよく分からないまま近くに行ってみることに。説明書きには『駒橋発電所落合水路橋』と書かれている。朝日川と水路橋が直角に立体交差し、さらに朝日川と並走して流れる用水路の3系の流れがある(図6)。

朝日川と並行して流れるのは農業用水で朝日川から水が引かれている。もう一つの朝日川と直交する水路橋に流れるのは、発電用水。これは朝日川ではなく、桂川から水を取水している。東京電力所有の水路橋で、1907年に建設された。現在も使用されており、7連の煉瓦アーチの建築の美しさなどから国の重要文化財に指定されている。

この発電用水を国土地理院の地形図(図7)(2万5千分の1)で詳しくみると、取水口の標高は440m、そのまま水路橋によって高い位置を確保し、山間部を通り、駒橋発電所へ水を落す直前の標高は410mとわずか30mしか下がっていない。90mの落差でもって水を落し発電できる。少しでも高い位置から水を落としたいという想いがこの水路橋に表れている。これが分かるともう一つ疑問がわく。なぜ、水路橋を通してまで桂川から水を持ってきているのか。朝日川で農業用水を取水している付近の標高は桂川の発電用水取水口とほとんど変わらない。桂川が本川だから支流の朝日川よりも流量が多かったからここから取水したのかとも考えられる(残念ながら水文・水質データベースにも相模川上流域(桂川)の流量観測所はないので不明)。仮に本川のほうが、流量が多かったとしても、100年前であれば、確立された水利権はほとんどなかっただろうし、本川より流量の若干劣る支流であっても十分な発電用水は確保できただろう。敢えて桂川から水をひき、水路橋をつくった理由を知りたい。次回行く時は周囲をもっと入念にみて、この疑問を解決したい。ちなみに、桂川から取水して駒橋発電所で水を落とし、桂川に放流するまでの約10kmが減水区間になっている。

100年前に位置エネルギーを計算して、取水点を決めたこと、設計に見合う電力量を産むために水路橋という土木構造物で高い位置に水を流したこと etc... 100年前の日本の技術力侮る事なかれ。



図6 駒橋発電所水路橋(国指定重要文化財)



図7 発電用水の経路(国土地理院地形図に加筆)  
(赤が発電用水、青が河川、数字は標高)

### 4. 猿橋

どんどん下り、大月市付近の『甲斐の猿橋』(図8)に到着。この橋は『日本三大奇橋』として古くから知られている。崖になっている高い位置の木の橋がかかっている。なんで奇橋と呼ぶのか橋を見たら一瞬でわかった。まず、川底から100m近くある位置に橋をかけている。100m近く高さがあるのでさすがに橋脚を立てて橋をつくるのはできなかったのだろう。普通ならここで吊り橋になるところだが、吊り橋でもなく、



図8 甲斐の猿橋（日本三大奇橋）

普通の木の橋。刎橋という技法が江戸時代に確立されたそうで、刎木を何重にも積み重ねていくそうだが、橋脚がないのが渡河するには十分なスリルだ。橋ができる前のことを考えるとどうやってこんな場所に橋をかけたのか気になる。

## 5. 城山ダムと相模ダム

猿橋を出発した頃には16時半。予定ではこの後相模川水系のダムめぐりをしてだが相模川水系のダムカードを全て集めるつもりだったが、今からでは宮ヶ瀬ダムは諦めるしかない。（ダムカードは17時までのところが多い。17時までダムカードがもらえる城山ダムに行くと施設の人がちょうどお帰りになるところだったが、「遠くから来たんでしょ？ちょっと待ってね」とわざわざ引き戻ってカードをいただいた。ありがたさが身に染みる1枚だ。ダムカードいただいた後、夕暮れの城山ダムを見学。このダム、面白いことに堤体が主要道になっていて、ひっきりなしに車が行き交っている（図9）。普通ダム管理者は堤体の上に車が通るのを嫌がり、代わりに橋が架かっていることが多いのに、ちなみにダムのつくりは重力式コンクリートダム。最後に相模ダムに到着。残念ながらあたりが暗くなりすぎて写真はとれなかった。しかしここは相模湖交流館が21時半まで開館しているのでその時間まで配布している。ダムの施設でこんな遅くまで開いているのはめずらしいが、ここは生涯学習施設の役割も果たして市民の人が多目的に利用しているようだ。受付のお姉さんにカードをいただいている時に受付のふと横にあった『ダムマニアグッズ』と書かれている看板が目がいったしまった。ダムカード入れケース、放流のデザインのストラップ、手ぬぐい、印鑑…。ダムカードをいただきに行っただけのはずが、誘惑に負けてほとんど買ってしまったのは内緒です。今年の7月には『ダムマニア展』が開かれるそうなので、またの機会に出かけたい。



図9 城山ダム（堤体は県道）

### 【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているのかについて研究中。最近のお気に入りにはダムマニアグッズ収集。

